

加藤桜老公像 除幕式

令和2年11月12日(木) 10時～ 笠間小学校正門

加藤熙(加藤桜老の玄孫)氏によりご寄贈いただきました加藤桜老の銅像竣工を記念し、除幕式を行います。



■ 開催趣旨

明治の新時代教育に先導的な役割を果たした加藤桜老は、かつて時習館の都講(講師)を務めていました。ゆかりのある旧時習館(笠間小学校)に銅像を設置、式典を開催することで、功績を顕彰し後世へと伝えることを目的としています。

■ 加藤桜老公像 除幕式

日時 11月12日(木) 午前10時～

※11月12日は、加藤桜老の命日にあたります。

場所 笠間小学校 正門

※駐車場は、グラウンド側駐車場をお願いいたします。

式典内容

- 主催者あいさつ
- 寄贈者あいさつ
- 来賓あいさつ
- 感謝状贈呈
- 御礼のことば
- 加藤桜老公像 除幕
- 記念撮影

参集範囲：約150名(笠間小学校6年生児童、寄贈者親族及び関係者等)

この件に関するお問い合わせ

笠間市教育委員会 生涯学習課 担当:竹江

電話番号:0296-77-1101(内線381) ファックス番号:0296-71-3220 e-mail:gakushu@city.kasama.lg.jp

幕末の志士に影響を与えた儒学者 加藤 桜老 (1811~1884)



加藤桜老は、幕末に水戸学の心を受けつぎ、尊王を掲げて多くの志士や文人と交流、あるいは指導をし、明治維新のかけの功労者と評された人物です。

桜老は号で、実名は初め信智、後に熙といい、呼び名は麟、後に有隣といいました。文化8年(1811)に水戸市浜田村の水戸藩士佐藤政祥の子として生まれました。7歳の時、外祖父にあたる笠間藩士の加藤信義に預けられ、14歳の文政7年(1824)に加藤家の養子になりました。この年に藩校の時習館に入学し、のちに教授となった森田桜園に指導を受けました。

文政11年18歳で中小姓として笠間藩に出仕。藩校時習館の都講(講師)になりました。

天保元年(1830)20歳の時に都講をやめ、水戸藩の学会沢正志斎の門に入り3年間学び、その間藤田東湖にも指導を受けました。天保9年28歳で、幕府の昌平坂学問所に入り、儒学や雅楽、兵法等幅広く修業しました。

笠間にもどった後、天保13年藩主相続をきっかけに藩内に騒動が起きました。改革派の桜老らは騒動を起こした罰として、弘化元年(1844)10日間の「慎」の罰を受けました。藩政に不満があり、信念を貫くため藩への出勤の命にも従わなかったため、嘉永4年に41歳で隠居を命ぜられました。

安政3年(1856)隠居所として2階建ての十三山書楼を建てました。1階は門弟の教育の場「詠帰塾」で、笠間藩士ばかりでなく、水戸や府中の青年たちも進んで指導を受けに訪れました。2階は応接間で、全国の多くの志士が教えを受けに訪れて、談論をする場でした。中でも長州の高杉晋作は2度も訪問しており、桜老は晋作の思想や行動に大きな力を与えました。

文久2年(1862)長州藩主から藩校の教授に迎えたいとの申し入れがあり、江戸へ出立しました。長州藩邸に入り、翌年には京都へ上ることになりました。京都では公家や諸国の志士と論議したり、朝廷に提出する意見をまとめたり、日本の政治のあり方について自分の考えを広めることに努めました。

文久3年長州藩庁のある山口に下り、教授として藩校明倫館で指導する一方、三条実美らの公家や尊王の志士と交流し、さらには、兵制、内政、外政などの文書をまとめ、独自の考えを深めていきました。

明治になると長州・笠間両藩主からこれまでの功績に対し賞を受けました。その後、新政府の軍務官御用掛、漢学所御用掛、そして安房神社、賀茂別雷神社などの神官を務め、明治10年(1877)に67歳で退官しました。その後、東京小石川に大同学社を建て子弟の教育にあたりました。その間教育に関する論文や雑誌を発刊して、国の政治や教育に老いても情熱を燃やし続けました。

明治17年11月12日、国事と教育に捧げた74年の生涯を閉じました。

